

『徒然草』研究——第一三五段について——

土屋博映

一、はじめに

『徒然草』がどのような趣旨でまとめられたかという問題の解答は非常に難しい。これはあらゆる文学作品についての、共通するテーマであろうが、『徒然草』は、古典であるがゆえに、さらに独創的なものもいえる、様々な内容を含有する、いわゆる随筆文学であるという点^①が、その難解さをはなはだしいものとしている。それを乗り越えるには、様々なアプローチが考えられるだろうが、全体の構成をふまえて追求していくのは一つの方法として有効だと考えられる。周知のことだが、『徒然草』は、上下二巻から成り立っている。そして、序段を含む総計244段の配列は、多少の

異同はあるものの、諸本によって大きく異なることはない。ほぼ序段から最終段の「第二四三段」まで順番に書きつがれていったというのが通説である。さて、上巻の冒頭段(序段)と最終段(第一三六段)、さらに下巻の冒頭段(第一三七段)と最終段(第二四三段)は、最初と最後におかれるべき何らかの意味(趣旨)を持つと考えられる^②。序段と、第一三七段、さらに第一三六段については、すでに本学「紀要」に、自己の見解を発表した。本稿では、その流れを受けて、上巻の最終段、「第一三六段」の直前に存在する「第一三五段」を取り上げ、その存在価値を、第一三六段との関係を中心に追求してみたい。

「紀要」では、第一三六段について、次のようにまとめた。
 「さて、本段の存在価値は、前段(第一三五段)とのセットで

考えるべきだという、小松の見解は³ただし。兼好は第一三五段と第一三六段のセットで上巻のまとめとした、その意図は、人間は本来何も知らないもので、知ったふうには振舞うとろくなことはない、という意味ととらえたい。これは下巻最後の、父との「仏問答」⁴とも関連する。本段は、些細な出来事をたまたま上巻末に置いたのではなく、まさに兼好の主張したいものとしてこの位置に置かれたと考えることができる。」

これを受けて、本稿は展開することになる。第一三六段は、第一三五段に対し、どのような価値をもつのか、第一三五段は、第一三六段に対し、どのような価値をもつのか、を追及することである。

II、本文について

① 第一三五段全文⁵

資季の大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中将に逢ひて、「わぬしの間はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」と言はれければ、具氏、「いか侍らん」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」と言はれて、「はかばかしき事は、片端も学び知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「まして、こ

もとの浅き事は何事なりともあきらめ申さん」と言はれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。おなじくは、御前にてあらそはるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし」と定めて、御前にて召しあはせられたりけるに、具氏、「幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬこと侍り。むまのきつりやうきつにのをかなかくほれいりくれんとう、と申すことは、如何なる心にか侍らん。承らん」と申されけるに、大納言入道、はたと詰りて、「是はそぞろことなれば、言ふにも足らず」と言はれけるを、「本より深き道は知り侍らず。そぞろごとを尋ね奉らんと定め申しつ」と申されければ、大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

以上本文である。以下、本段の学説をいくつかあげておく。

② 学説⁶

「単純で自信満々の資季が、二十五も若い具氏に、まんまと負かされてしまう。資季が、自らを知らない尊大さによって、衆目の前で失敗するところを、著者は冷静にとらえて笑殺している。資季に対する具氏という、対照的な性格の設定もみごとであるが、一段としては、前段の思想の一つの展開とみることができよう。」

本説では、「対照的な性格の設定」「前段の思想の一つの展開」

とあるところにポイントがある。

③学説2⁷

「この段は、前の段に、『無智にして大才に交り』『雪の頭をいただきて盛りなる人に並び』などとあったのを受けて、老人の資季が二十五歳も若い具氏に問答を強いて失敗した事実を叙したものである。発端（『御前にて召し合はせられたりけるに』まで）・展開（『大納言入道、負になりて』まで）・終結と三段に展開しているが、主要部は発端・発展の二つにあり、それも、劇のごとく談話中心に運ばれている。宮中、あるいは院中における、実際場裡の一喜劇的挿話であつて、次の段と同じく、教訓的傾向は認めたいが、前の段を書いた連想の展開として、かかる笑話を記すに至つたのであらう。

この段を劇的といつたが、いかにも氣負つた、自信たつぷりで尊大な老人たる資季と、一応謙讓で、礼儀正しく、しかも冷徹な知性の人たる具氏との性格的対立が、二人の談話の上によく現れているのが認められる。そして、その話しぶりのうえにこそ、この段を書いた兼好の作家的手腕を認めるべきであらう。」

本説は、「前の段」を「受けて」とあること、「発端・展開・終結と三段に展開している」ということ、「主要部は発端・発展の二つ」とあること、「次の段と同じく、教訓的傾向は、認めがた

いが、前の段を書いた連想の展開」とあることに、ポイントがある。

④学説3⁸

「兼好が聞いたままの話は、おそらくこのような会話体ではなかつたであらうが、それを会話体にして、このように生き生きと筆録した構想は誠に見事なものである。（中略）

問答の中に、資季と具氏の性格が浮き彫りにされており、その場の雰囲気や顔の表情までもが写されているような感じがする。ところで、兼好はどういう意図でこの話を記したのだろうか。資季に対して非難めいた語を加えていないところを見ると、教訓的意図はなく、資季という人間に興味を感じて、その人間の面白さを語っているのではないかと思われる。」

本説は、「生き生きと筆録した構想は誠に見事」とあること、「教訓的意図はなく、資季という人間に興味を感じて、その人間の面白さを語っている」とあることに、ポイントがある。

⑤各説のまとめ

本段は前段「第一三四段」を受けて成立していること、資季と具氏の対象の妙、特に教訓的な意図はない、などというのが通説になつていふようである。

三、第一三五段の内容の検討

ここでは、本段の内容について、いくつかの点から、検討を加えたい。

①キーワードの検証⁹⁾

1、資季大納言入道

藤原資季。権大納言。歌人。勅撰集に31首入集。正応二年(1289)没。83歳。具氏より25歳年上。

2、具氏宰相中将

源具氏。宰相兼近衛中将。歌人。勅撰集に16首入集。健治元年(1275)没。44歳。資季より25歳年下。

3、わぬし

同輩または目下のものに対していう。

4、あらがひ

賭け物をして問い争うこと。

5、はかばかしき

れっきとしたこと。まじめな、重要なこと。

6、そぞろごと

とりとめもない、くだらないこと。

7、おぼつかなき

はっきりしない、確かにわからない。

8、ここともと

高遠なことでない卑近なことの意。

9、あきらめ

明らかにする意。

10、近習

側近に仕える人人。

11、御前

天皇または上皇の御前。

12、供御

ご馳走。饗膳。

13、むまのきつ

謎々の一種。古来、諸説があるが、確定していない。

14、所課

負わざとして課せられた供御のこと。

15、いかめしく

盛大に。立派に。

以上、11のキーワードについて取り上げたが、以下それぞれ検討する。

1の資季と2の具氏が主たる登場人物。最終的には二人の地位

は同じくらいだが、この話題の時点では、資季のほうが身分が上である。藤原氏と源氏との家柄の違いもポイントかもしれない。

3の「わぬし」は、敬意は薄い。「あんた」くらいに訳す。この語で資季が具氏を見下している可能性が高い。

4の「あらがひ」は、「勝負しよう」くらいであろう。この時点では賭け物については明確ではない。

5の「はかばかしき」は、「ちゃんとしたこと」「しっかりしたこと」である。本来の反義語は「はかなし」にあたるが、ここでは後の6の「そぞろごと」の反義語であり、「そぞろごと」は7の「おぼつかなき事」との関連語となっている。

8の「ここと（の浅き事）」は、「卑近なこと」の意で、前の「そぞろごと（の中に、おぼつかなき事）」に対応している。

9の「あきらめ」は、「明らかにする」意で、前の会話の「問ひ（奉らめ）」に対応している。

10の「近習」は「側近」。同じく女性の側近である「女房」と区別する語。どちらも11の「御前」に仕える。

12の「供御」は「ご馳走」の意。次段の第一三六段にも「供御」が存在し、本段との関連をうかがわせる。

13の「むまのきつ」以下は、謎々だが、当時すでに解答不能になっていたと思われる。

14の「所課」はここでは「供御」と同じものだが、負けた罰として課せられたものだから「所課」と表現した。

15の「いかめしく」は、「盛大に」などと訳す。この「いかめしく」がこの場面の資季と具氏の勝敗の結果の雰囲気を表している。軽く見過ごしてはならないだろう。

② 会話のやりとり

本段は会話のやりとりが中心である。地の文のほとんどが、「言ふ」「申す」であり、会話を読み解くことが、本段の本質をつかむ、兼好の趣旨を理解するのに必要なことと思われる。以下、会話を列挙し、検討する。必要に応じ、地の文も記す。

1、資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中将に逢ひて、
(地の文)

2、「わぬしの間はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」(資季)

3、「いかが侍らん」(具氏)

4、「さらばあらがひ給へ」(資季)

5、「はかばかしき事は、片端も学び知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」(具氏)

6、「まして、こことの浅き事は、何事なりともあきらめ申さん」(資季)

7、と言はれければ、近習の人々、女房なども、

8、「興あるあらがひなり。おなじくは、御前にてあらそはる

べし。負けたらん人は、供御をまうけらるべし」(近習、女房)

9、と定めて、御前にて召しあわせられたりけるに、(地の文)
10、「幼くより聞きならひ侍れど、その心知らぬこと侍り。む

まのきつりやうきつにのをかなかくほれいりくれんとう、と申す事は、如何なる心にか侍らん。承らん」(具氏)

11、大納言入道、はたと語りて、(地の文)

12、「是はそぞろごとなれば、言ふにも足らず」(資季)

13、「本より深き道は知り侍らず。そぞろごとを尋ね奉らんと定め申しつ」(具氏)

14、大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。(地の文)

以上掲げた例について、検討する。傍線部はとくに注目の必要があると考えられる部分。

1は、地の文だが、冒頭であるので、検討の必要あり。主語にあたるのが、資季で、目的語にあたるのが、具氏である。したがって、単純に考えれば本段の主人公は、資季ということになる。また資季には「とかや聞えける人」とついているが、具氏にはそれはない。どちらも兼好の生年(1283年頃)前後に没しているので、兼好は、この二人と面識はない。だから段全体が、伝聞過去の「けり」が使われているのだ。兼好は本段の内容を伝え聞き

た上で、兼好なりの再構成をしているわけだ。この「聞えける人」の部分は、実は段末の14と呼応していると考ええる。それは14でまた述べるが、主役資季の脇役である具氏にはそれをつける必要がなかったであろう。「逢ひて」は宮中の、「御前」に近い場所での出会ったものと考ええる。

2は、資季が具氏を認めると(「逢ひて」とある)すぐに口をきったもの。かねてから具氏には一言言いたかったのである。この会話はあまりにも唐突である。資季は具氏よりも25歳年上なのであるが、それは読者にはわからない。それを「わぬし」でさりげなく示している。後は敬語がその役割をはたす。資季の会話には「言はれ」と尊敬のみが、具氏の会話には「申され」と尊敬(「れ」もあるが、謙讓(「申さ」)が使われている。ここで、二人が歌人であることに注目したい。勅撰集入集の数で言えば資季は具氏の倍を数える。新進の具氏にその実力を示したかったと考えてはどうか。したがって、ここの「問はれんほどのこと」は、和歌についての問いなのであろう。「何事なりとも答へ申さざらんや」は、和歌について何でも教えてやろうということだ。

3は、それに対し、具氏は、短く「いかが侍らん」とこたえた。さあ、どうでしょうか、くらいである。短い、和歌の実力者の資季にまったく臆していないことを意味している。

4は、資季が「さらばあらがひ給へ」と挑戦した。「あらがひ」は『徒然草』全体でこの段に2例あり、あと1例しか用いられて

いない。「あらしひ」と似ているが、「あらがひ」は、正否・善悪を決定する意味合いが強い。そこで「賭けをする」などといった意味でも使われる。白黒決着をつけようじゃないか、といった意味合いだろう。具氏の「いかが侍らん」に対し、資季はむつとし、思わず口をついて出てしまったようだ。

5は、具氏の待っていましたという気持ちが会話の長さにあらわれていると見たい。「はかばかしき事」は、つまり「和歌のこと」であったのだろう。「学び（知り侍らねば）」は、「和歌の学び」を意味してしよう。そこで「そぞろごと」が出てくる。この言葉が後に活かしてくる。ここで、資季は、まだ和歌に関わる「そぞろごと」として捕らえていたのかもしれない。

6は、「まして」とある。つまり、本格的な和歌の質問でも答えられる、「まして」些細な質問など、簡単だ、ということだ。「こも」と「がややわかりにくい。辞書などには、「ここ」を強調した表現だと記されているが、どうだろうか。また「あきらめ」に注目である。この語も本段1例のみである。「あらがひ」とか「あきらめ」とか本書としては個性的な単語が存在するのは面白い。2で「答へ申さざらんや」と言ったのが、ここでは「あきらめ申さん」とあるのにも目をむけよう。わかりやすく教えてやろう、という意味ととりたいたい。さらに具氏を見下げていることになる。

7は、近習と女房が、会話に加わる。二人のやりとりは、彼等（近習・女房）の眼前で行われていたことがわかる。資季は、簡

単に引き下らない具氏に、面子をつぶすわけにはいかないのだ。8は、「興ある」で始まっている。二人の間答を周囲が興味を持って見ていたということになる。ならば二人のやりとりは、口角泡を飛ばすような激しいものではなく、お互いに表面的には冷静さを保っていたことになる。「あらしひ」とあるが、ここは「あらがふ」に近似した用法である。「あらがふ」は内面性が強く、「あらしひ」は外面性が強い、ととらえておく。「供御」がここで出現。「供御」は本書中、全部で5例、そのうち3例が本段と第一三六段に存在する。本段との関連の強さは、この言葉でも判断できる。9は、御前での「あらがひ（あらしひ）」となった。私的な勝負が、公的な御前試合になったことを意味している。こうなってはどちらも後にひけない。

10は、具氏の会話だが、わざわざ「具氏」と明示している。これは3も同様。名前が明示されるのは、おそらく強調表現であろう。3の「いかが侍らん」は、本段の構成において重要な会話だったことになる。もちろんこの10も同様である。「むまのきつ」以下の謎々は、2の唐突な資季の発言と同様、唐突である。ここらへんは具氏の仕返ししの雰囲気がある。

11は、「大納言入道」と名前が明示される。これも3・10と同様、強調表現である。「はたと詰りて」で返答のしようがない様子が表現される。周囲の者の描写がないのは、おそらく資季同様の気持ちだったからだと解釈しておく。

12は、困りきった資季の、やつとの思いの返答である。しかし、「そぞろごと」と言わざるをえなかつたのは、やむをえないが、見事に具氏の作戦にのつてしまったようだ。「言ふにも足らず」でおさめようとしても、具氏はやめない。

13は、「深き道」が、和歌の道をさすのであると考えたい。5の会話がこの会話の伏線になつたわけである。5の会話を短くすると、この13の会話になることが確認できる。

14は、まず、「大納言入道、負になりて」とある。「負」という言葉も本書中、このこと、他に1例しかない。「負て」ではなくて、「負になりて」とあることに注目したい。完璧に負けたのではなく、作戦に負けたわけで、極論すれば具氏の「屁理屈」に負けたということにならう。「いかめしく」にも注目したい。負は負だが、「いさぎよく盛大に」、負けを認めたことへの、兼好の評価があるように思われる。最後の「けるとぞ」が、冒頭の「とかや聞えける人、」に呼応しているのである。ここで、本段の主人公は、具氏でなく、資季であることが確認できる。

和歌の名手資季が、若手の具氏の鼻をへしおろうかと考えたが、和歌ではなく、とんでもない謎々で、逆襲をくらつたという話である。しかし、具氏の作戦が常識外であつたこともあり、資季の歌人としての面目はいささかも失っていないところに注目する。屁理屈に負けても痛くもかゆくもないわけで、そこであつさり負

を認めて盛大にご馳走したということ、負けた資季の株をあげた可能性もあると考えたい。なお、藤原(資季)氏と源(具氏)氏の勝負、ということも関わるのかもしれないが、本稿ではふれない。

四、おわりに

本段第一三五段は、続く段、第一三六段と類似している。しかし、その内容は相当異なる。どちらも主人公が上から目線で「何でも答えてやろう」と言っているのであるが、本段がどこかしら「めでたしめでたし」の印象が感じられるのに対し、後段は手厳しくとつちめられたというふうに感じられる。それは最後の表現によるのである。本段は「いかめしく」が、華やかさを引き出しているが、後段は「まかり出でにけり」である。主人公がその場をもちたてる本段と、主人公が消えてしまう後段ではおのずと主人公の人間の価値が異なるのである。

本段は、和歌の名手資季と和歌の新進気鋭具氏との問答であるが、その和歌に関わることなく、それとまったく無関係と云つていい謎々で勝負がついたところにユーモアが感じられるのである。ところが後段は医師が政治家に、医学(薬学)の教養的知識を問うたのに、基本的なことも答えられなかった。専門家として、大恥をかいたのである。本段は笑い話ですむが、後段は専門家とし

て立ち上がれないほどの打撃をうけたといっても過言ではない。

まとめれば、本段により、後段が導かれたと考えてよい。本段は、後段の引き立て役であって、兼好が主張したかったのは、後段であるということだ。

これについては、小松英雄が同様の指摘をしている。彼は、「本段は、ただの法螺なら、笑ってすまされるということを示し、後段は、専門的な事柄について法螺をふいたら命取りになりかねない、ということを示しており、この二つの順序を入れ替えて逆にすると、「しまりがなくなつて」しまつと述べている。

なお、本稿ではふれられなかったが、いくつかの学説に、本段は、前段の第一三四段と関連する旨述べられていたので、次には、第一三四段と、本段、後段との関連を研究してみたいと考えている。

注

- (1) 『徒然草抜書』（小松英雄・講談社学術文庫）による。
- (2) 本学紀要「第45号」「第46号」「第48号」所収。
- (3) 『徒然草抜書』（小松英雄・講談社学術文庫）による。
- (4) 『徒然草』の第二四三段で、最終段にあたる。
- (5) 『徒然草』（日本古典文学全集・小学館）の本文による。
- (6) 『徒然草』（日本古典文学全集・小学館）の頭注による。
- (7) 『徒然草全注釈 上巻』（安良岡康作・角川書店）
- (8) 『徒然草講座 第二巻』（古沢貞人・有精堂）による。

- (9) 『徒然草』（日本古典文学全集・小学館）の頭注による。
- (10) 『徒然草抜書』（小松英雄・講談社学術文庫）による。